

母親規範の社会学的研究

社会経営課程地域行動コース 17H2027 岡田朋奈

1. はじめに

女性の社会進出の発展を考えると、女性の正社員としての雇用や労働条件の改善、管理職への登用がフォーカスされるとともに、「母親（女性）が育児をするものだ」という社会に浸透する考え方を否とする声も昨今では出てきた。しかし、女性の社会進出にともない共働き夫婦が増加したにも関わらず、母親が育児の責任の一番手であるべきだという「母子関係パースペクティブ」の概念が社会には根強く生きており、必ずと言っていいほど、「仕事か家庭か」を選ばざるを得ない状況に多くの女性が直面している(野田、2017)。

さらに、男性のもつ母親規範（「母親が育児の責任の一番手である」などの規範）に女性が影響され、仕事と育児の両立を諦めてしまっている可能性が考えられる。加えて、家庭で家事や育児を引き受けることで、家庭では感謝されつつも、男社会（職場）では「二流の労働者」と見なされる現状もある（阿部、2016）ことから、男性自身が、「父親として家庭で家事や育児を行い、家庭を支える」ことよりも、「男として社会で働き、収入を得ることで、経済的に家庭を支える」ことを「家庭での役割だ」と思っている現状もあると考えられる。

このような現状や、女性自身にも「母親が育児をするものだ」という意識が残っており、結婚・出産後に仕事よりも家庭を選択し、労働市場から離れてしまうことで、日本の労働力人口の減少を引き起こし、たとえ結婚・出産を選択せず仕事のみを選択しても、晩婚化や少子化に直面するという悪循環に陥る。

これからの女性の社会進出にとって、「母親規範」はおそらく足かせとなっていくだろう。

2. 調査目的

本研究の目的は、女子大学生に「母親（女性）が育児の一番の担い手である」などの考えがどの程度浸透しており、どのような要因によって「母親（女性）が育児の一番の担い手である」などの考えが浸透しているのかを明らかにすることである。

女子大学生を対象者に設定する理由として、令和元年度3月の新規学卒就職者のうち、高卒女性が7万1千人であるのに対し、大卒女性が22万1千人であり、高卒女性よりも、大卒女性が新規学卒労働市場において大きな比重を占めていることから、女子大学生に着目する（文部科学省「令和元年度学校基本調査」）。高学歴若年女性の間には、母親規範が根強く残っているとすれば、仕事よりも育児を選択する可能性が高く、労働市場に影響を与えることになる。加えて、女性が労働市場で活躍できる社会ほど少

子化問題が改善されており、女性が出産・育児を安心して続けることができれば、合計特殊出生率の上昇を期待できる（三具、2015）。このように、高学歴若年女性の母親規範の浸透度合いを確認することは、これからの女性のキャリア形成と少子化問題を考える際に必要である。

3. 調査概要

本調査では、大学生に「女性が育児の一番の担い手である」などの母親規範がどの程度浸透しており、またどのような規範をもっているのかについて、アンケート調査を行った。

3-1. 調査対象者

本調査は、大学生の母親規範の浸透度について把握するという目的のもと、質問紙調査を行った。調査日程は、2020年10月1日、6日と9日の計3回対面で行い、調査対象者は、弘前大学人文社会科学部の学生男女合わせて217名と弘前大学教育学部の学生、男女合わせて99名の合計316名を対象とした。回収票は316票（男性142票、女性174票）であった。

表 3-1-1 回答者の属性（N=316）

性別			年齢		
(%)			(%)		
	男性	44.9	10代		33.3
	女性	55.1	20代		60.4
	無回答	0.0	30代		0.3
			無回答		6.0
			平均値		24.6
			きょうだい	あり	83.2
				なし	16.1
				無回答	0.6
			恋人	あり	34.8
				なし	63.9
				無回答	1.3
出身地					
	県内	45.2			
	県外	53.9			
	海外	0.3			
	無回答	0.6			
居住形態					
	両親と同居	23.7			
	父親と同居	0.3			
	母親と同居	4.4			
	一人暮らし	61.7			
	寮・				
	シェアハウス	6.3			
	その他	3.5			

4. 調査結果（一部抜粋）

4-1. テキストマイニングによる自由記述の分析

表 4-1-1 は、性別と、子育てのために夫と妻のどちらが仕事を辞めるべきか（q8「もし、夫と妻のどちらかが、子育てのために仕事を辞めなければならないとなったとき、夫と妻のどちらが仕事を辞めるべきだと思いますか。」）の単純集計表である。「子育てのために妻が辞めるべきである」と回答した男性が98.1%、女性が96.2%で、男女ともに「子育てのために仕事を辞めるのなら、妻である」という意識を強くもっていること

がわかった。

表 4-1-1 性別と「子育てのために夫と妻のどちらが仕事を辞めるべきか」

子育てのために夫と妻のどちらが 仕事を辞めるべきだと思うか			
	夫	妻	合計
男性	1.9(2)	98.1(105)	107
女性	3.8(6)	96.2(153)	159
合計	8	258	266

なぜ「妻」を選ぶのかについての「理由」を分析することで、大学生にある規範について明らかにしていく。

q8「もし、夫と妻のどちらかが、子育てのために仕事を辞めなければならないとなったとき、夫と妻のどちらが仕事を辞めるべきだと思いますか」について、その理由を質問した自由記述から、テキストマイニングによる KH Coder3 を活用した分析を行った。「もし将来、子育てのために仕事を辞めなければならなくなったとき」という仮定質問の形態をとり、対象者 316 名のうち、妻を選択した者で記述があった 240 名を分析対象とした。テキストマイニングによる自由記述の分析を行い、対象者のもつ男性規範、母親規範を詳細に明らかにする。テキストマイニングを行うにあたって、「子育てのために仕事を辞めるのなら妻である」を選択した理由を回答した男性が約 98%、女性が約 96%であったため、「子育てのために仕事を辞めるのなら妻である」を選択した理由を回答した自由記述のみを分析に用いた。

はじめに、KH Coder3 を用いて「前処理」のコマンドを実行し、文章の単純集計を行った結果、258 の段落、275 の文が確認された。また、総抽出語数は 3794、助詞や助動詞を除いた異なり語数は 370 語であった。

次に、記述に含まれるすべての文章を単語レベルに分解し、それぞれの語の出現頻度を算出した。表 4-1-2 は、出現頻度の多い順に抽出語 370 語を示したものである。

表 4-1-2 抽出語 370 語のリスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	80	大きい	5	結局	2	にくい	1	見込み	1	対応	1
する	54	得意	5	言える	2	にる	1	厳しい	1	待遇	1
女性	44	平均	5	限界	2	ぬ	1	現時点	1	大黒柱	1
ない	43	やはり	4	固定	2	のむ	1	現実	1	大事	1
ある	42	安心	4	効率	2	はたらく	1	現状	1	大切	1
夫	40	可能	4	好く	2	ほしい	1	現代	1	大体	1
妻	38	家族	4	差	2	ほっする	1	呼ぶ	1	大半	1
男性	36	家庭	4	産休	2	ほとんど	1	公務員	1	単純	1
子育て	33	金銭	4	授乳	2	みる	1	好む	1	旦那	1
多い	29	傾向	4	習慣	2	むずかしい	1	行う	1	丁寧	1
育児	27	現在	4	出す	2	もらえる	1	合う	1	長ける	1
高い	25	持つ	4	出る	2	やれる	1	今回	1	長期	1
母親	25	女	4	出産	2	ゆっくり	1	最後	1	適材適所	1
仕事	23	状況	4	将来	2	よい	1	最初	1	適切	1
子ども	21	正直	4	昇進	2	より	1	最適	1	度合い	1
収入	21	続ける	4	上手い	2	イコール	1	産む	1	働	1
男	21	低い	4	信頼	2	キャリア	1	産後	1	謎	1
考える	20	負担	4	身体	2	ケース	1	残る	1	入れる	1
働く	19	面	4	整う	2	コミュニティ	1	事情	1	妊娠	1
家事	18	有利	4	生まれる	2	サポート	1	時間	1	能力	1
稼ぐ	18	良い	4	生涯	2	スキル	1	時期	1	比べる	1
自分	18	いい	3	存在	2	パートナー	1	時代	1	不安	1
イメージ	15	お金	3	多く	2	ポスト	1	次第	1	不可欠	1
辞める	14	かせぐ	3	体	2	ムリ	1	自然	1	不具合	1
いる	13	つく	3	大変	2	愛	1	失う	1	付く	1
社会	13	とる	3	男女	2	愛情	1	実際	1	父性	1
良い	13	なんとなく	3	知識	2	扱い	1	主	1	負う	1
向く	12	もし	3	中心	2	意味	1	主体	1	部分	1
できる	11	わかる	3	長い	2	維持	1	主夫	1	風習	1
なる	11	育休	3	賞金	2	一概に	1	主婦	1	復帰	1
今	11	家	3	適す	2	一緒	1	種類	1	雰囲気	1
いい	10	近く	3	父	2	影響	1	受ける	1	文化	1
いう	10	言う	3	母性	2	奥さん	1	周囲	1	聞く	1
やすい	10	考え	3	問題	2	何となく	1	就く	1	平等	1
そう	9	自身	3	欲しい	2	加味	1	柔軟	1	変える	1
一般	9	取る	3	あげる	1	家具	1	重ねる	1	方	1
母乳	9	勝手	3	あやす	1	家計	1	出せる	1	望ましい	1
ほしい	8	小さい	3	いく	1	過程	1	出世	1	無職	1
まだ	8	世間	3	いける	1	回る	1	所得	1	無難	1
やめる	8	専念	3	いまだに	1	回復	1	詳しい	1	無理	1
よい	8	側	3	うまい	1	外	1	上	1	明確	1
給料	8	得る	3	うむ	1	学校	1	上昇	1	目	1
子	8	比較的	3	おおい	1	感じ	1	条件	1	役割	1
子供	8	父親	3	おもう	1	管理	1	職	1	役職	1
場合	8	風潮	3	お母さん	1	間違い	1	職種	1	役目	1
必要	8	与える	3	かたち	1	関係	1	職場	1	優れる	1
やる	7	養う	3	きめる	1	基本	1	食事	1	優先	1
育てる	7	理由	3	しいて	1	嬉しい	1	世の中	1	予定	1
少ない	7	こなせる	2	しれる	1	気	1	世話	1	理解	1
人	7	愛着	2	ずっと	1	気持ち	1	制度	1	立てる	1
母	7	悪い	2	そそげる	1	休み	1	成り立つ	1	立場	1
よる	6	回答	2	そば	1	休む	1	正規	1	料理	1
支える	6	概念	2	それぞれ	1	求める	1	生計	1	力	1
体力	6	割合	2	つくりあげる	1	拠り所	1	精神	1	力量	1
日本	6	感じる	2	つて	1	距離	1	昔	1	歴史	1
年収	6	慣習	2	づらい	1	金	1	潜在	1	劣る	1
安定	5	環境	2	どうしても	1	屈辱	1	選択	1	労働	1
稼ぎ	5	器用	2	ない	1	形態	1	全く	1	話し合い	1
給与	5	技術	2	なお	1	経済	1	想定	1	話し合う	1
出来る	5	逆	2	なぜ	1	決める	1	相手	1	諷う	1
親	5	休暇	2	なんか	1	嫌う	1	多分	1		
選ぶ	5	近い	2	なんとか	1	見る	1	妥当	1		

(1) 男性についての共起ネットワーク

図 4-1-1 は、表 4-1-2 を元に、「共起ネットワーク」のコマンドを用い、男性の共起ネットワークを表したものである。この図では、個々の円が単語を表し、出現回数が増えれば円が大きくなる。また、それぞれの円を結ぶ線は語と語の関係を表し、文章中の接近した場所に現れている。強い共起関係ほど、この線は強くなっている。

以下、特徴的であった男性の自由記述の一群の一部を抜粋する。

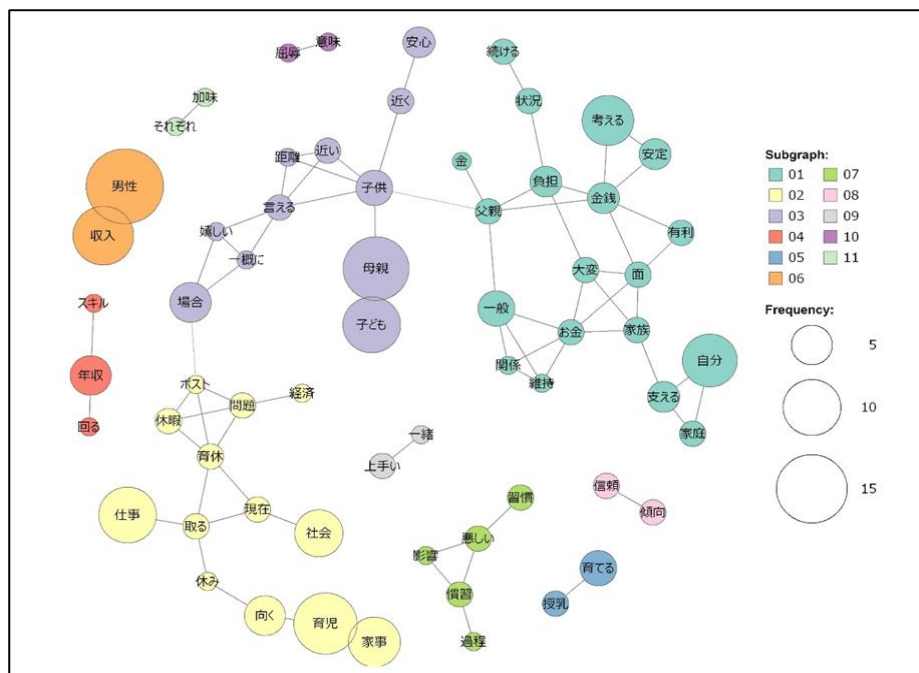


図 4-1-1 「子育てのために仕事を辞めるなら妻である」を選択した男性の共起ネットワーク

ア. 男性が働き、家族を支える

図 4-1-1 の右上に「考える」「自分」「金銭」「支える」「一般」「家族」「安定」などの一群が見られる。実際の男性の記述からの抜粋を表に示した。

表 4-1-3 ア群に属する記述

- ・収入が安定している方が仕事をするべき
- ・最後まで働いて金を稼がなければいけないのはやはり父親のイメージがあるから
- ・経済面の問題は自分がなんとかしたい
- ・金銭面の安定を考えたときに夫は、仕事をした方がいいと思うから
- ・まだ男性の方が金銭的な面で有利だから
- ・自分が男なので男として家庭を支えるべきだと思うから
- ・自分が働いていた方がいいと思うから
- ・夫が働いて家族を支えなければならないと思うから
- ・一般的に男の方が年収が高いと思うから
- ・一般的に男性の方が女性よりも賃金が高くなっていて、男性が稼いだ方が金銭的負担が少なくなりそう

表 4-1-3 の「収入が安定している方が仕事をするべき」「金銭面の安定を考えた」などの記述から、男性の方が女性より収入が安定しているという意識があり、「自分が男なので男として家庭を支えるべき」「夫が働いて家族を支えなければならない」「一般的に男の方が年取が高いと思うから」などの記述から、経済的な負担は男性が負い、働くことで家族を支えなければならないという男性規範をもっていることがわかる。

イ. 母親は子どもの近くにいるべき

図 4-1-1 の左上中央に「母親」「子ども」「子供」「近い」「距離」などの一群が見られる。実際の男性の記述からの抜粋を表に示した。

表 4-1-4 イ群に属する記述

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・どちらも言えないがしいていうなら母親の方が子供との距離が近い気がするため・一概にどちらが辞めるべきとは言えないが私の場合母親が側にいてくれると嬉しいから・母親が近くにいた方が子供が安心しやすいと思ったから・子どものそばにいて安心感がある方が妻だと考えたため・子どもを育てることは母親主体の方が適しているのではないかとなんとなく思うから・子育ての最初の時期に母親が子どもにとっての拠り所だから・潜在的に、母親の方が育児が上手く、子どもと長い時間一緒にいた方が良いと思うから・子どもには母親が大切だと思うから・子どものために母親が近くにいてくれた方がいから・結局子どもには母親が近い方が良い |
|---|

表 4-1-4 の「母親の方が子供との距離が近い気がする」「母親が近くにいた方が子供が安心しやすい」「子育ての最初の時期に母親が子どもにとっての拠り所だから」などの記述から、母親は子どもの側にいるべきだという母親規範をもち、「子どもを育てることは母親主体の方が適している」「母親の方が育児が上手い」などの記述からは、母親が育児をする方がいいという意識をもっていることがわかる。

ア群、イ群の自由記述の抜粋より、男性は、「男性が働いて家族を支えるべき」「夫が働くべきというイメージがある」という男性規範、「子どものために母親は子どもの近くにいるべき」「女性は家事や育児に向いている」という母親規範と性別役割意識をもっていることがわかる。

家事や育児をすることで男社会では「二流の労働者」と見なされる現状(阿部、2016)のなかで、男性は「男なら働くべき」という男性規範を強め、同時に、女性に対して「母親なら育児に向いている」という母親規範をもっていることから、「子育ては妻が行うのがよい」という選択をしたと考えられる。

(2)女性の共起ネットワーク

図 4-1-2 は、表 4-1-2 を元に、「共起ネットワーク」のコマンドを用い、女性の共起ネットワークを表したものである。この図では、個々の円が単語を表し、出現回数が増えれば円が大きくなる。また、それぞれの円を結ぶ線は語と語の関係を表し、文章中の接近した場所に現れている。強い共起関係ほど、この線は強くなっている。

以下、特徴的であった女性の自由記述の一群の一部を抜粋する。

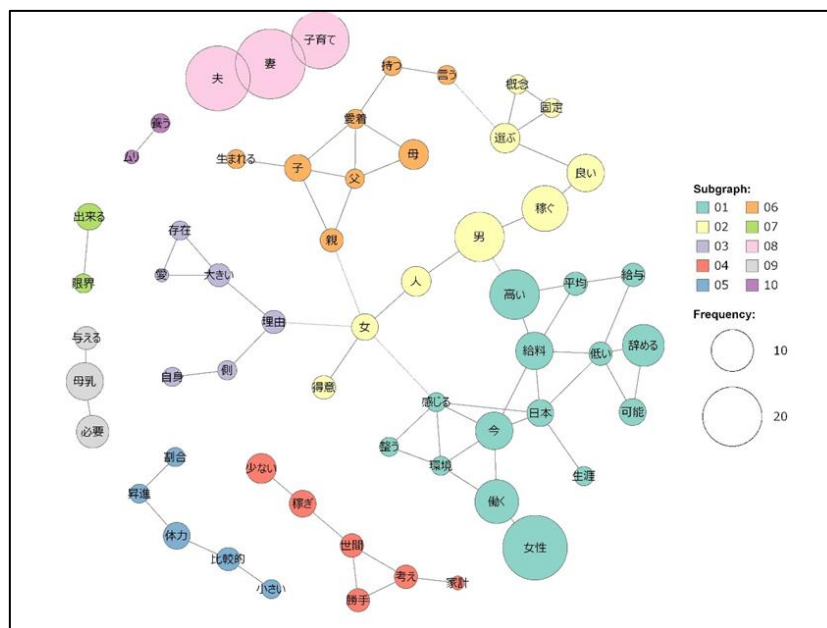


図 4-1-2 「子育てのために仕事を辞めるなら妻である」を選択した女性の共起ネットワーク

カ. 男性の方が仕事をしやすく、女性が働く環境の整備が不十分

図 4-1-2 の右下に「女性」「働く」「今」「給料」「高い」「辞める」の一群が見られる。この一群に関する実際の女性の記述からの抜粋を表に示した。

表 4-1-5 カ群に属する記述

- ・ 男の方が仕事も多く給料も平均的に高そうだから
- ・ 男性の方が給与が高いため
- ・ 妻が辞めるケースが多いと思うから
- ・ 給料が低い方が辞めるべきだと思うが、今の日本で低い可能性が高いのは女性だから
- ・ 今の社会を考えると、男性の方が出世などをしやすく、働く環境が整っているのではないかと感じるから
- ・ 女性の方が辞めやすい風潮があると思うので
- ・ 今もまだ男性の方が働きやすい環境にあるから
- ・ 現在の社会は女性が管理職になる制度が整っていないから
- ・ 男性の方が生涯年収が高いことが多いから

表 4-1-5 の「男の方が仕事も多く給料も平均的に高そう」「妻が辞めるケースが多いと思う」「男性の方が働きやすい環境にあるから」「女性が管理職になる制度が整っていないから」などの記述から、女性と男性の給料格差や、子育てと仕事を両立しながら女性が活躍できる環境の整備が不十分である社会状況が、女性に「子育てのために仕事を辞めるのなら妻である」という選択をさせていると考えられる。

キ. 育児は妻がするイメージ、子どもが小さい時母親にしかできないことがある

図 4-1-2 の左上に「母」「子」「愛着」などの一群と、その下にある「存在」「大きい」「理由」「自身」「側」などの一群が見られる。これら 2 つの群に関する実際の女性の記述からの抜粋を表に示した。

表 4-1-6 キ群に属する記述

<ul style="list-style-type: none">・自分は母親に育てられて母親に愛着を持っているため・なんとなく。親がそうしていたから・夫は子育てをするというより子育てをする妻のサポートをしているイメージがあるから・妻の方が育児・家事に関して向いている傾向があるから・子どもにとって、母親の存在・愛は大きいと思うから・小さい子どもは比較的父親より母親の方を好むから・子どもが小さい時は母親にしかできない役割があると思うから・自分から生まれた子どももあるから・子の愛着から考えたときに子は母親をほっしやすいため、父より母が子の近くにいてあげたほうがよい・妻というか私自身が、もし辞めなければならない場合、自分が子供の側にいたいから・私自身が子育てをしたいと思うから
--

表 4-1-6 の「母親に育てられ母親に愛着を持っている」「親がそうしていた」「自分が子供の側にいたいから」「私自身が子育てをしたいと思うから」などの記述から、自身の母親に影響を受けるなど、子育てを自身の手でしようという意識があり、「夫は子育てをするというより子育てをする妻のサポートをしているイメージ」「妻の方が育児・家事に関して向いている傾向があるから」などの記述から、性別役割意識があることがわかる（表 4-1-6）。また、「小さい子どもは比較的父親より母親の方を好むから」「子どもが小さい時は母親にしかできない役割があると思うから」「母親の存在・愛は大きいと思うから」などの記述から、女性自身が母親規範をもっていることがわかる。

カ群、キ群の自由記述の抜粋より、女性は、男性の方が女性に比べて収入が高く仕事を続けやすい環境にあり、一方で、女性が管理職になる制度が整っていないなど、男性と女性で昇進や収入において差があると感じている。加えて、世間や親の影響により女性が育児をするものというイメージや、子供が小さい時には母親しかできないことがあるという意識をもっていることがわかる。

4-2. 考察

本調査の結果から、男子大学生は「男性が働くべき」や「男性が経済的責任を負うべき」などの意識が顕著に強いことがわかった。「子どもをもつことがあった際に、夫か妻のどちらかが仕事を辞めなければならないとすると、どちらが辞めるべきだと思うか」の仮定質問において、女子大学生は「自分で育児をしたい」「子どもが小さいうちは一緒にいたい」などの「母親として育児をしたい」という理由も挙げていた。一方で、男子大学生では「父親として育児をしたい」という理由が挙がっていなかった。むしろ「男性の方が女性よりも収入が高い」「男性が稼ぐべき」などの「男性として」の理由が多く挙げられていたため、「育児をするために仕事を辞めるのなら妻である」という回答を選択しているのだと考えられる。女子大学生が、「親として育児に向かうならどうしたいのか」について考える一方で、男子大学生は「自身が親として育児に向かうならどうしたいのか」について考える機会が少ないのではないだろうか。子どもを持つことに対して、男性が「親として育児をする」ことよりも「経済的に家族を支える」という意識が強いことにより、結果として女性が「親（母親）としての責任」を一手に引き受けざるを得ない状況にしているのではないだろうか。

さらに、女子大学生には、男子大学生にはみられなかった記述がある。「管理職への登用の機会が少ない」や「働く環境が整っていない」などの女性が仕事をする上での男性との格差、「出産や育児と仕事の両立ができる環境が整っていない」などの女性の働きづらさに言及する意見も多数みられた。社会に男性と女性の収入格差やキャリア形成の機会の不平等感があるという現状も、大学生に「子育てをするために仕事を辞めるのなら妻である」という選択をさせていると考えられる。

女性の感じる「働きづらさ」が、結婚や出産、子育てを困難なものと感じさせ、将来、子育てをすることがあれば「職場環境が整っていないことや男女で収入の差があることから妻が子育てをする方が適切である」と考えてしまう現状があるのかもしれない。

引用・参考文献、URL

阿部真大 2016 「性別役割分業とケア労働－「男らしさ」「父親らしさ」と育児－」工藤保則ほか編『〈オトコの育児〉の社会学』ミネルヴァ書房

文部科学省「学校基本調査」

〈https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm〉（最終アクセス日 2020/12/06）

野田潤 2017 「家族の近代化と子育ての変容」永田夏来・松本洋人編、『入門家族社会学』新泉社

三具淳子 2015 「初職継続の隘路」岩田正美・大沢真知子編『なぜ女性は仕事を辞めるのか』青弓社